

千葉に建築を訪ねる

二 デイズニールランドの夢

建築家 三沢 浩

東京デイズニールランドは千葉県浦安市舞浜の一にある。総面積二五万坪でそのうちテーマパーク一四万坪、駐車場だけでも八万坪を数える、元埋立地だ。一九八三年四月開園以来、人気は昇るばかりで、当初は三年目の危機が危惧されたこともあったが、一切お構いなく年間一千万人の入場者を超え、一日当



りで一〇万人を超える日も少なくない。こうなると浦安市の人口を上回る人がここを訪れていることになる。しかも昨年一九九八年には一七五〇万人を数え、テーマ館も当初の三四館が四五館に増えた。なぜこれほど多くの入びとがこの世界を目指すのか。そしてミッキーマウスやドナルドダックが、いかに多くの入びとに夢を与え幸せを売ってきたのか。それほどこのお伽の国はテーマパークとして、文化を築き上げてきた。そして誰もがつくりものと知りながら、自らもユートピアを見てきたということを疑問としながら、それでもこの偽の文化という事実の存在を否定することが出来ないでいる。

浦安にあらわれたアメリカ、それは本家のロサンゼルス郊外、アナハイムに一九五五年七月に生まれたそれと全く同じにつくられた。その開園当日はPRもあって大変な混みようであったといい、アスファルトが真夏の太陽で溶けるなどのハプニングもあり、それが却って人を集めた。私が最初に見たのは一九六三年で、まだ八年目だったが賑やかさこの上なく、アトラクションは殆ど見ずに乗り物だけでくたびれて帰ってきた。だが当時は東京の話もフロリダの話もない頃で、珍しさ

だけで満足していた。フロリダのウォルト・デイズニー・ワールドの出来たのは一九七一年で、この中のマジックキングダムがデイズニールランドに当たり、それもエプコットセンターは隣接する大人用のテーマパークだが、これも覗いた。さらにユーロ・デイズニーがパリ郊外に一九九二年に出来たがそれをその年の秋に見る機会があった。これは周辺のホテル建築の方に興味があり、夜のエンターテイメント、西部開拓とバッファロー・ビルの大仰な演し物が受けて大入りだった。

さて浦安だが、これらの世界の三つと違う所が、メインストリートのガラスアーケード（写真）である。これは他のどこにもない。LAやフロリダに雪はなくても、パリには降る。日本にだけあるのは梅雨時のことを心配してだろうか。あとはほとんど変わることはない。ただアトラクションの本数はアメリカが多い。LAは一九八三年に大改造を加えて、リピーターを呼ぶことに成功したと聞くが、日本の場合は隣地にワールドに匹敵する、別のテーマパークを建設中とか。

何故、デイズニールランドを「千葉の建築」とり上げたかは問題であろう。これをまず解明しなくてはならないと思われる。一九六

三年の最初のアメリカ滞在の折、一九九三年に六七才で死んだ建築家チャールズ・ムーアを主任とする建築科で教えた。ムーアの新しいポストモダニズムが当時は中々のみこめなかつたが、次第に興味を持つようになった。レモンドの許で純粋な「後期モダニズム」の洗礼を受けてしまった後のことであるから、ムーアの建築が遊びにも見えた。それが彼の書いたものにぶつかって、ようやく解り始めたのである。彼がカリフォルニアのパークレールからイェール大学に移る少々前のことであった。彼は次のようにある雑誌に書いている。「デイズニールランドは過去数十年の西部における最も重要な一つの建築物である……それはロサンゼルスでは殊に、永い間忘れてしまっていた公共的な環境に対応する、あらゆるものを再生させているからである。デイズニールランドは公共の世界にあって、見せかけに参加させてその双方の演出をさせる。……公共といつても入場料をとって」

時は一九六六年、まさにポストモダン建築の始まりの時代。ロバート・ヴェンチュリ の『複合と対立』の出版されたのが同年である。つまりこの二人の設計や出版が「モダニズム」つまり「近代建築」を揺るがした。そ

の一〇年後チャールズ・ジェンクスが『ポストモダニズムの建築言語』を出版し、ムーア達のような動きに名を付けたのである。ヴェンチュリはその書の中で「近代建築は退屈でつまらない」といい、ムーアは雑誌の上で「何でももってこい、何でも料理してやる」と息巻いた。こうして極めて大衆化した、一見幼稚とも見える建築やスーパー・グラフィックを発表し、名作「シーランチ（Sea Ranch）」を残した。ムーアの大衆性は、だから建築を孤高のものにしたり象徴的にしたり、あるいは鉄とガラスやコンクリートだけにこだわることを忘れさせた。建築は自由になり、材料も構造も平面も実のびのびと使われたのである。自由な平面と立面でありながら、規律を守ってきた実直な「近代建築」は粗野に見え

やんちゃに見えるムーア流の新しい形体が見出されたのである。ヴェンチュリは実作には中々至らなかつたが、公共建築にアメリカの旗をグラフィック化し、「コマージュリズムを自由にとり入れ、グラフィックや偽の階段を取り付けることも、消防署に大きな看板を取り付けることにも、こだわらなかつた。

だからこそデイズニールランドは、ロサンゼルスに起こった巨大なテーマパークであり

ながら、公共性を一挙に表出し、誰もが馴染める建築であると認めたのである。その通りメインストリートに入る入場者は、東京の場合でも大きなアーケードの下にアメリカの町並みを見る。ワールドバザールには日本語が少ない。すべてが表だけの偽りの町、中はひとつの建物のおみやげ屋。しかしこれを過ぎて正面に、又してもお伽の国のヨーロッパの城を見る時、そしてそこで分かれるテーマランドに行く時、すでに期待に胸を弾ませる入場者は、違う国の違うセンスに浸り、それがひとつの世界であることに熱中するのである。そのひとつの世界こそ「ポストモダニズム」の心でもあり、「近代建築」から抜けるためのトンネルであったことに気付く。

「ポストモダニズム建築」の世界が過ぎてみると、「近代建築」は退屈であったことに気付く。しかしあまりにも商業主義に煽られていることを知ったり、バブル時代へのステップがうまく利用されていたのだということを知る時、バブルの泡のごとく、泡沫的建築であったと気付く点が多い。グラフィック建築や、「ピー建築」そして「コマージュリズム」そのものの建築に至ったあの時の世界を、「デイズニールランド」は良く教えてくれる（続）